

# 現地事情を踏まえた教育課程編成

— 教務主任の視点から —

前香港日本人学校大埔校 教諭

北海道伊達市立伊達小学校 教諭 永井 修

キーワード：新型インフルエンザの流行、学校指導要領の改訂、子どもたちを取り巻く環境

## 1. はじめに

香港は、1997年7月1日に、イギリスから中華人民共和国へ返還され、特別行政区となった。それまでイギリスの統治を受けていたこともあり、中国の文化とイギリス・欧米文化が融合した、活気のある貿易都市である。

692万人以上が生活をし、雑踏が当たり前の香港。街中は人とぶつからずに歩くことのほうが難しく、広大な北海道から派遣された私にとっては、そこからがカルチャーショックであった。

また、自然に目を向ければ、235余りの島、過去の英国占領時代、軍隊の訓練の一環として山を縦断していたというトレイルコース、海に眼を向ければきれいな浜辺ありで、雑踏から離れると美しい自然も存在している。

近年、アジアの人々の人口が増加し、欧米の人々の人口が減少している。なお、2005年10月現在の在留邦人（総領事館届出者数）は25,670人であったが、実際には3万人近い在留邦人がいると言われている。このうち日本人学校に通う小中学生は、香港校、大埔校、中学部3校で約1500名いる。大埔校には514名の児童が通っている。（21年6月現在）。その他、500名を超える現地校や国際学校に通う小中学生がいる。

公用語は、英語と普通話（中国の標準語）だが、事実上の共通語（生活言語）は方言の1つである広東語。人口の95.2%の人々が広東語を常用もしくは理解し、38.1%の人々が英語を常用もしくは理解しているといわれている。とはいえ、英語が通じると実感できるのは都心部のみで、学校のある新界地区では通じにくいことが多い。特に、タクシーやバスなどの運転手には英語は通じないのが通常である。

## 2. 新学習指導要領への移行期の教務主任の仕事

平成22年度の香港日本人学校小学部大埔校の時数概要は以下の通り。（5学年で算出）

	香港日本人学校小学部大埔校
年間授業日数	200日
年間カット時数	68時間
学校行事時数	58時間
実授業時数	968時間
余時数	12時間

以下に時数を適切に調整し、学校教育目標を具現化していくかが、新教育課程を見据えた最大の課題であった。

新学習指導要領の完全実施に向け、移行期間が始まったのが21年度。

私は、その前年の20年度より教務主任を務めてきたが、一番苦労したのが、

学習指導要領改訂に係る情報収集であった。

また、改訂に備え、大きな課題となったのが

時数確保であった。

そのために行ったのが、

**時間割の改訂** + **行事の精選**である。

→**時間割の改訂**

授業時間を、1日15分増加（11時間目の追加）

これに伴い、バス利用者会と協議をし、バス下校時刻の変更。

→**行事の精選**

“ある行事を減らす”ことはしなかったが、“この行事に使う時間を更に確保してほしい”という意見のある先生方と協議の上で納得してもらうことに心掛けた。

とにかく「余時数」が究極に足りていない現状から、学校教育目標を達成するための行事を精選し、学習時間を確保する取組と情報提供に奔走。



香港日本人学校小学部大埔校 全景

**【新型インフルエンザ（H1N1）の猛威】**

21年度は、しっかり整備をしてスタートしたものの、1学期中ごろより流行し始めた「新型インフルエンザ」により、計画は大きく崩れた。

2009年6月19日 香港政府が「すべての幼稚園・小学校に、夏休み終了までの休校措置」を指示。

これによって、1学期の学習はほぼ半分程度の実施となる。

**子どもの学習機会を確保し、保護者に納得していただくために**

「学習内容がすべて終われないではないか。学費はどうなるのか」

「日本人学校は、香港の学校ではないのだから、日本の学習内容を終わられるよう、休校する必要はないではないか」

「もし学習が終わらなかったらどうするのだ。受験も控えている。どう責任をとってくれるのか」

「学校として、一体どういう対応をするのか」

矢継ぎ早に入ってくる保護者からの電話に対応するのは、教頭と教務主任の役割であったため、学校としての対応を香港日本人学校3校での協議も踏まえ、大埔校では、以下の通り対応した。

- ① 土曜登校日（7回：約23時間分）設定による授業時数の確保
- ② 休校期間中の、「自習・質問教室」の実施（授業ではなく、自由参加）
- ③ いくつかの休日を登校日に変更
- ④ 午前日課の日を終日日課へ変更

**【21年度の教訓を踏まえて、22年度に向けた教育課程編成準備をどうするか】**

「国内の小学校又は中学校における教育と同等の教育を行う」ことを目的としている日本人学校が、「海外における教育という特性を生かし、国際性豊かな日本人の育成に寄与する教育活動を展開することが求められている」ということも踏まえて、どのように教育課程を編成していくか。

特に、21年度のような新型インフルエンザなどの予期せぬ事態も考慮に入れながら、細部にわたって教職員の協力を得ながら、主に以下のことを推進していった。

①日課表の変更

『時数確保』を第一義とし、そのための日課表改訂を行う。

「15分1ポイント」としてモジュール制を採用している大埔校では、週1時間（15分×3）を増やし、時数を十分に確保できるようにした。反面、「朝学習15分」を時数としてカウントすることは適当ではないとして、廃止した。

②移行措置に係る校内研修会の実施

③指導計画及び評価規準表の改訂（20年度より3年間にわたる計画）

④通知表の完全デジタル化

別紙を手書きで作成していた英会話通知表のデジタル化

⑤諸会議の効率化による時間短縮（学習内容の変更に伴い、教材研究の時間確保）

⑥校外学習（現地理解学習）実施に関する手順の改訂

より多くの現地素材を生かし、安全に実施できるよう、国際交流ディレクターの活用を視野に入れた計画を作成した。

⑦各種名簿の一元化

校内で使用する名簿類が多岐にわたり、事務作業の煩雑化が著しくなるのを避けるため、名簿の一元化を図る。負担軽減案の一つ。

⑧学力テストの分析方法の工夫

求められる学力（課題となっている学力）が現状どうなっており、それをいかに日常の教育活動の中で実践に移していけるかを考えたとき、分析の視点の視点も変えていく必要が生まれた。

日本のように新学習指導要領に関わる情報が不足している中、教職員の方々には大変苦勞をかけたが、一方で負担軽減をしつつ、体制を整えることも、教務主任の大きな役割のひとつであった。



香港日本人学校小学部大埔校 全景

【日本の子どもたちとの違いを明らかにしたうえで、教育課程を編成する】

大埔校に学ぶ児童の多くが日本人であり、いつかは日本へ戻り学ぶ子どもたちである。

しかし、子ども一人ひとりの状況を見たとき、日本で暮らす子どもたちとは異なる現状もある。

そのことに配慮した教育課程を編成したうえで、各教員は、その差異に配慮していった上で、計画し実践・評価をしていった。

以下は、日本人学校の子どものたちやその子どもたちを取り巻く環境についてまとめたものである。

日本全般とは異なる点が見られる。

	日本人学校の子ども
学習環境	日本同様、塾通い（日系の塾あり）が多い。
学 力	全般的に高い。CRTでも全国平均を下回ることはない。 読書量も、全般的に高め。表現力は高い→表現することに対して『臆する心』が日本の子に比べて少ない、という実感。

体 力	<p>日常運動できる場所が制限されており、また夏は酷暑ということもあるせいか、日本の子より劣る。(毎年5, 6年生が行う体力テストの結果から) 存分に体を使って遊べる広い場所がないのが実情。但し、学校にプールが併設され、水泳指導が十分にできる環境であったため、泳力は高い。</p>
-----	--

### 3. おわりに

「学習指導要領の改訂」という貴重な時期に、在外教育施設において教務主任という立場で教育課程編成に携われたことは、大変ではあったが、とても貴重な経験となった。

いくら編成を進めていっても、実際に授業をする各担任や教科担任一人ひとりの協力があってこそ成立するものである。幸い、香港日本人学校小学部大埔校では、先生方の温かい理解と協力を得ながらスムーズにその作業を進めていくことができた。また、香港だからこそできる学習をしようという教員一人ひとりの気概があったからこそ、ダイナミックに教育活動を展開できていったのではないかと考える。また、このたびの学習指導要領の改訂において盛り込まれた「言語活動」の視点については、日頃より日本人学校で意識しながら実践を進めている「母語を大切にした教育活動」と「香港での生活に生きる英会話学習」の大切さを改めて痛感する機会となった。日頃より学校長が先頭となって、多くの児童が触れることができた「俳句づくり」、図工科が中心となって推進した「絵手紙づくり」なども、あらためてその活動が本来もつ輝きを放ち始めたと思う。

その裏にある職員一人一人の協力や苦勞、何より「子どもたちのために」という熱気に満ちた日本人学校が今後ますます発展していくことを願ってやまない。